

二 水晶

石英と云ふものは造岩鉱物として花崗岩などに多く含まれているし、石英脈となつても広く分布しているので、誰も珍らしいとは云わない。極く普通の鉱物だ。しかし、美しいその結晶―水晶となると流石に少く、珍らしい―そこで、宝石に準じたような価値が生れてくるのだ。

さて、讃岐で水晶といえは、古くから飯野山が知られているようで、水晶を「白石英」と、呼んだ平賀源内は「和名、ケンジャリ、また、カブト水晶と云う山中土石の上に生ず、皆六角にして上尖れり、上品なるもの明徹にして色白く黯黒なるものは下品なり。讃岐飯山産は中品なり」と書いている。

讃岐富士、飯野山の水晶のことは、その地方の人達にはよく知られていたが、私はその飯野山産の水晶を実際に見たことがない。恐らくもう、殆んど取りつくされたのであろう。見つけたとしても、近頃では砂鉱のように極く小さいものか

も知れない。

ところで古くは随分大きい美晶も出ていたらしい。寛政八年十一月、高松の殿様（八代松平讃岐守頼儀）が封内巡視に出かけたが、その時の記事が高松藩記に詳しく誌るされている。岡部郡大夫という藩儒の書いた記事である。

その中に、「殿様は巡視の途次、土器村の進藤氏（大庄屋）の家にお立寄りになつた、その時進藤氏は飯野山産の水晶を一塊、殿に献上した……」 という意味の記事がある。

殿様に献上する種の水晶―それが一塊とあるところから察しても、立派な水晶の品群に違いないと思う。して見ると、飯野山に昔は随分美晶のものを産していたことがわかるのである。

松平家にその飯野山産の水晶……、進藤家の献上した水晶……それが今も残っているかどうか……実はそこまで気になって来るのだ。

昔の人は、水晶は氷が化石になったものと考え、水精とも書いた。また、瑛と

一字名で書いても水晶のことをあらわしたものである。

一般にどこの国でもそうだが、水晶の出る山には水晶山と云う名のつく場合が多い。讃岐では小豆島の福田港―その西方に水晶山がある。一名玉山とも云う。文字通り今も水晶が出る山だ。ここには花崗岩のベグマタイトの脈岩がある。

その中から出ている。小豆島名勝図絵には、土の性すべて細石のごとし、尤もところどころ水晶の蔓筋ありて是を穿てば多くあり、しかれども今は大きなもの少しとある。割合に大晶のものが出たらしいが、現在ここもその産がなくなっている。これまでのところ、長さ十五センチから二十センチ程のものが残っている。

小豆島にはこの外、土庄町の小瀬からも出るし、離島の豊島―そこの家浦からも産している。小豆島産のものは割合に大きいが、大抵はやや黒褐色の煙水晶と云う種類のものである。

讃岐名勝図絵などによると、水主山の水晶を土産品として記している。この水主山は今の内町の南部の花崗岩採石の山である。ここも飯野山と同様、もとは

大晶も出たらしいが、今は微細なものに過ぎないと云う。

寒川郡石田（寒川村）の天王山―これも一名水晶山と呼んでいるが、石田村史を見ると、「古来水晶を産し遠近より採集に来るものが多いしが、今や採り尽し殆んどなし、惜むべきことなり…」と説明している。

この外、山内村福家（国分寺町）や、満濃池附近と満濃町の長炭小学校校庭等にも出たと云う。

長炭小学校の校庭から出たものは柱面の発達しない微小なもののようなものである。中国の本草綱目には倭国に水晶多しと記しているぐらいだから、日本は昔、水晶が多かったのは事実らしい。その日本にも今は水晶の産は少くなっている。

元来水晶というものは、単独にも生ずることがあるが、多くの場合は花崗岩の洞隙―そこにしつかりと岩石に密着して芽を噴き出したように群生するものだ。

それを晶群といつて、岩石中の空洞を晶洞或は晶腺というのだが、それが金属鉱床のように広くなく、また厄介な鉱石として出るのではなく、そのものずばり見つ

けられるから、すぐに取り尽され、水晶資源は枯渇し易い。

讃岐でも昔は、土器の進藤家が殿様に献上した飯野山の水晶のように、かなり立派な美晶が出ていたに違いない。それが現在ののように微細なものか：それも出るか出ないか、：今ではただ産地名だけが残っているのもその為である。結局、それらの山々は、今では水晶の遺蹟地と云うだけのことになっているのだ。

金剛砂（柘榴石、ザクロ石）

古くから讃岐産の金剛砂はよく世間に知られていた。ダイヤモンドの知られていなかった時代には、この石が一番堅いものと考えられて、金剛石、金剛砂といわれた。本草綱目訳義には、

「金剛山の麓より出ず、玉を切るに此の砂、水と合わせて齒のなき鋸にて引く時は切れるなり此砂は茶色にして光あり、讃岐より出るものは大にして一分ほどあり、

河内より出るは細かし……」

とあり、金剛山の麓から出るもので或は金剛砂と云ったのかも知れない。

この文にある通り、讃岐産の金剛砂は大粒であるので知られていた。

金剛砂は一名合玉石とも云うが、重修本草綱目啓蒙には、「合玉石、金剛砂色赤黒き砂なり、また黄赤色なるものあり、形多く稜角ありて玉石を切り或は磨くに用いる砂なり、河州の金剛山、和州の生駒山等より出す：讃州には大塊四五分のものあり：」と出ているので、讃岐は金剛砂、しかもその大粒を産するので知られていたことがわかる。

その大粒の金剛砂は多度津の白方から出るものを指しているようで、西讃府志に、「白方の海浜にあり、形、楊梅の如し因て楊梅石ともいえり……」

と、あるし、讃岐名勝図絵には、「西白方村の見立の浦にあり、其地は浦島という浜手の山の北の岸から五六間ばかり海中に岩あり、その岩のあたりにある。潮の干いた時でなければ取りにくい……」

金剛石をその地の者は鉄砲の玉という。丸金剛石の出る所、かれこれあり：

さてこの地、人の往来する所であるから、金剛石を拾って取る者多し、一旦、金剛石取るべからずの禁止札を建てたが、却てその所在地が明瞭になり取る人も多くなり、この禁札を取除いたという……」とあるから、世に知られた讃岐産の大形金剛砂というものは、確に白方産のものに違いない。

白方では、その大形の外に細粒の金剛砂も出ている。これは「カマクラ砂」と呼んでいたが、色は黒くて金色であると書かれている。

名勝図絵には白方の南、弥谷山の西峰からも出ているとあるが、これらの金剛砂は地質学的に弥谷山を形成する安山岩質集塊凝灰岩の風化分解し、その中に含まれていたものが砂鉱として産するようになったものである。

白方以外の産地として、知られたのは、今の大川郡大川村（旧富田中村）で、その雨瀧山から出ると松岡稠氏の『新撰讃岐風土紀』に記されている。

この雨瀧山は安山岩（紫蘇輝石角閃安山岩）の山で岩石は灰白色を呈しているが、

その安山岩中に含まれていたものが、風化分解して出るのである。

堅いので昔から研磨用に使用し今も金剛砂と昔の名を用いているが、鉱物学名では拓榴石ザクロイシ：ガーネットというのが正しい。

ところで、ガーネットといえば宝石のように思う。しかし、ガーネットと云つても、宝石とは限らない。普通宝石になるようなガーネットは少い。ちようど、石英は多くても水晶はすくないのと同じで、日本では宝石となるザクロ石は殆んどない。ただ、信州和田峠のザクロ石は鉄分を含んで暗血紅色で美しく輝いた結晶をしている。しかし、それも透明度がないので、ようやく、その儘でネクタイピンに利用する程度だというから、宝石に用いられるものはすべて外国産に限られている現状である。

ところで、良質といえは讃岐でも坂出の川津町：そこからは比較的結晶の美しいものが出た。

川津の御獅山ゴジヤマ：円錐形で城山につづいた山である。その西麓：黒岩天神の境内

附近から採集されたのがそれで、斜方十二面体、径は一・五センチ程のものだ。しかし、これとて先ず良品の部類と云う所で、透明度は足りない。川津の旧家、山口弥右衛門寄贈のザクロ石が、今も坂出の鎌田郷土博物館に蔵されている。川津の産地、御獅山も集塊岩、凝灰岩、角礫凝灰岩の円頂丘で風化の結果洗い出されたものである